

京都今宮祭における鉾町の形成過程

著者	内田 みや子
雑誌名	関西大学博物館紀要
巻	19
ページ	101-122
発行年	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/8246

京都今宮祭における鉾町の形成過程

内田 みや子

はじめに

京都市内では、神輿が町内を巡る祭礼が四月から五月に集中して行われる。この時期に行われる祭礼の多くには「剣鉾(けんぼこ)」と呼ばれる祭具が登場し、渡御列の先頭を行くのが見られる。剣鉾は、長さ約十メートルの棹の先端に剣先と呼ばれる剣形に象った真鍮製の薄い板を頂く大型の槍または鉾のような形状をしている。剣先は、松や菊などをモチーフにした飾り金具によって彩られ、「吹散(ふきちり)」という幟状の布と「鈴(りん)」と呼ばれる小型の鐘が、棹の先端あたりから垂らされる。これを差し手がひとりで腰の革ベルトで固定し、垂直に立てた状態で移動させる。そのため、差し手が歩くたびに剣先が揺れ、鈴が棹に当たって涼やかな音色を響かせる。現在では差し手の不足もあり、剣鉾を水平に寝かして四〜五人で担い渡御列に加わる場合が多い。(写真1)

これまで京都の祭礼研究といえば祇園祭とその山鉾に関心が集中し、多くの研究成果がある一方で、それ以外の神社についてはあまり研究がなされてこなかった。特に剣鉾が登場する祭礼については、祇園祭の山鉾と同様にそれぞれの氏子区域で鉾町が形成され、祭りの伝統を現在にまで伝えているのにも関わらずその実態は知られていない。そこで本研



写真1 鉾差し(嵯峨祭)

究では、現在でも剣鉾が登場している今宮神社の今宮祭に焦点をあて、祭りの現在の様子を整理するとともに、中世から近世の史料を用いて今宮祭の変遷と、鉾町が形成されていく過程を考察する。

一、現在の今宮祭と剣鉾・鉾町^①

現在、今宮祭には九町から各一本ずつ剣鉾(以下、鉾とする)が出される。戦後数年までは十二町から鉾が出されていたが、住人の高齢化や

表1 今宮祭における鉦町と祭りへの参加状況（2011年）

鉦の名称 および町名	町のうごき				特記事項
	5/4	5/5(神幸祭)	5/5~14	5/15(還幸祭)	
東千本町(扇鉦)	組立	渡御参加	居祭	渡御参加	くじとらず・神輿のすぐ前
西千本町(菊鉦)	—	組立・渡御参加	居祭	居祭	
歓喜町(松鉦)	組立	渡御参加	居祭	渡御参加	くじとらず・渡御列の先頭
作庵町(柏鉦)	組立	渡御参加	—	—	
花車町(枇杷鉦)	組立	渡御参加	居祭	居祭	
牡丹鉦町(牡丹鉦)	組立	渡御参加	居祭	居祭	
西五辻東町(龍鉦)	—	組立	居祭	組立 渡御参加	
上善寺町(沢瀉鉦)	—	—	—	—	現在、祭礼には参加していない
五桜町(剣鉦)	—	—	組立・居祭	渡御参加	
東石屋町(葵鉦)	—	—	—	組立 渡御参加	現在、町としては祭礼には参加していないが、同志社大学の有志により出鉦されている。
芝大宮町(蓮鉦)	—	—	—	組立・居祭	渡御には参加していないが、町内で居祭は行われている。
観世町(蝶鉦)	—	—	—	—	現在、祭礼には参加していない

町全体が新興住宅街に様変わりし、祭りに参加する人が減ったなどの諸事情によって、現在では上善寺町（沢瀉鉦）、芝大宮町（蓮鉦）、観世町（蝶鉦）の三町は渡御に鉦を出すことを止めている。また戦前は神幸祭、還幸祭の両日ともに鉦を出していたが、次第に祭への参加方法が簡略化され、東千本町（扇鉦）、歓喜町（松鉦）の二町を除く七町は、神幸祭、還幸祭いずれか一日だけ鉦を出すようになっていた。（表1）^②

（一） 神幸祭

五月五日は今宮祭の神幸祭である。神幸祭に鉦を出す町では、早い町で前日より組み立てなどの準備が始まる。東千本町（扇鉦）、西千本町（菊鉦）、歓喜町（松鉦）、作庵町（柏鉦）、花車町（枇杷鉦）、牡丹鉦町（牡丹鉦）がこれに当たる。町によって多少の差異が見られるものの、大筋では同じである。ここでは西千本町（菊鉦）を例として見ていく。

西千本町は大宮通から寺ノ内通を西へ入ったところにある。十五軒程度から成る小さな町で、東千本町と歓喜町と隣接している。（地図1）

西千本町の鉦は二本あり、剣先の中子に天保十三年（一八四二年）の銘がある鉦を二〇〇九年に全面修復し使用している。もう一本は明治八年（一八七五年）の銘が見られ、現在は京都市歴史資料館にて保管されている。「菊鉦」の名の通り、鉦の剣先を彩る鍔は、立体的に形作られた枝菊で、これが雲形の中央に三日月を配した受け金の周囲を飾っている。基本的にこの鍔は真鍮製である。長柄は漆塗りで、菊花の鍔が全体に散らすように打ち込まれており、非常に美しい意匠となっている。（写真2）

が刺繍されている。(写真4、5)

軸と吹散の前には二段の祭壇が生まれ、上段中央に神社から頂いた御幣を飾り、その左右に御神酒、赤飯、昆布、するめ、大根などが三方にのせて配置される。下段には柿と紅白餅、小皿に乗せた洗米と塩が供えられる。かつて渡御に供奉するまで、鉦を居祭で祀っていた名残と思われる木製の台が祭壇の脇に置かれる。居祭は還幸祭終了まで行われる。午前十時半、鉦の組み立てと居祭の準備が完了すると、鉦とともに神輿に供奉する者は袴と袴に着替えるために一旦自宅へ戻る。その後、再集合し町会長宅にて昼食をとる。

正午、神社に向けて出発する。「菊鉦」と書かれた高張提灯を先頭に、袴・袴に菅笠姿の町会長を先頭に、町の人々が行く。その後を水平にした鉦を肩に担ぐ者、赤いビロード地に金の菊紋が入ったカバーを被せた剣先の箱と吹散の箱を持つ者が続く(写真6)。現在では高張提灯や鉦などを担うのを学生アルバイトに依頼している。神社に到着すると、南門から境内に入り本殿前まで直行する。本殿に向かい合うように鉦を立てかける台があり、ここに一旦鉦を立てかけて吹散を装着する。鉦の準備が整うと神職が鉦に祈禱を捧げ、一同はその後方で低頭して控える。その後、神職は一同に対して修祓を行う(写真7)。これが終わると、すぐに鉦から吹散を外し箱にしまう。そして町会長から注意事項などの伝達をした後、速やかに神社をあとにして、千本通へ向かう。千本通り沿いの歩道で、他の鉦町と一緒に、先に神社を出発し、鷹峯方面へ巡行している神輿が下ってくるのを待つ。

午後一時半頃、神輿が合流すると渡御がスタートする(写真8)。渡御

列は、車太鼓、社名旗、神職、鉦の順となっている。さらに鉦町間の順番も決まっておおり、二〇一一年は松鉦、枇杷鉦、牡丹鉦、柏鉦、菊鉦、扇鉦の順であった。このうち松鉦と扇鉦は毎年順番が固定されているが、他の町はくじ引きで順番を決める。鉦の後には八乙女や獅子、神輿が連なる。鉦は必ず神輿より先に行くことされている。神幸祭では千本通、北大路、寺之内通、大宮通などを経て御旅所へ至るまで、氏子範囲のおおよそ北半分を廻る巡行路を行く(地図②)。但し、鉦だけは御旅所まで行かずに、巡行の途中で各町へと引き上げる。西千本町では町に戻り次第鉦の解体を始め、それが終わると足洗と称して近隣の飲食店で宴席が設けられる。

十六時ごろ、ようやく渡御列は御旅所に到着し、神輿宿りに神輿が安置される。神輿は還幸祭までの約十日間、御旅所に安置される。その間、湯立祭(五月第二土曜または日曜日)が行われる。

(二) 還幸祭

現在では五月十五日に近い日曜日が還幸祭に当てられる。二〇一一年の場合は五月十五日であった。神幸祭同様、前日または祭り当日に鉦の組み立てなど準備が始まる。東千本町(扇鉦)、歓喜町(松鉦)、五桜町(剣鉦)、東石屋町(葵鉦)、西五辻東町(龍鉦)がこれにあたる。準備のようすは前述した西千本町とほぼ同じであるため省略する。

正午、昼食や着替えなどを済ませた町の人々が鉦のもとへ再集合し、各町から鉦が出発する。御旅所には行かず、大宮通寺之内あたりにて車太鼓を先頭に、列を成して待機する。その間、各鉦ごとに神職より修祓

写真 今宮祭（神幸祭）のようす（西千本町）



写真3 鉾の組立作



写真4 居祭の準備



写真5 居祭の飾り付け



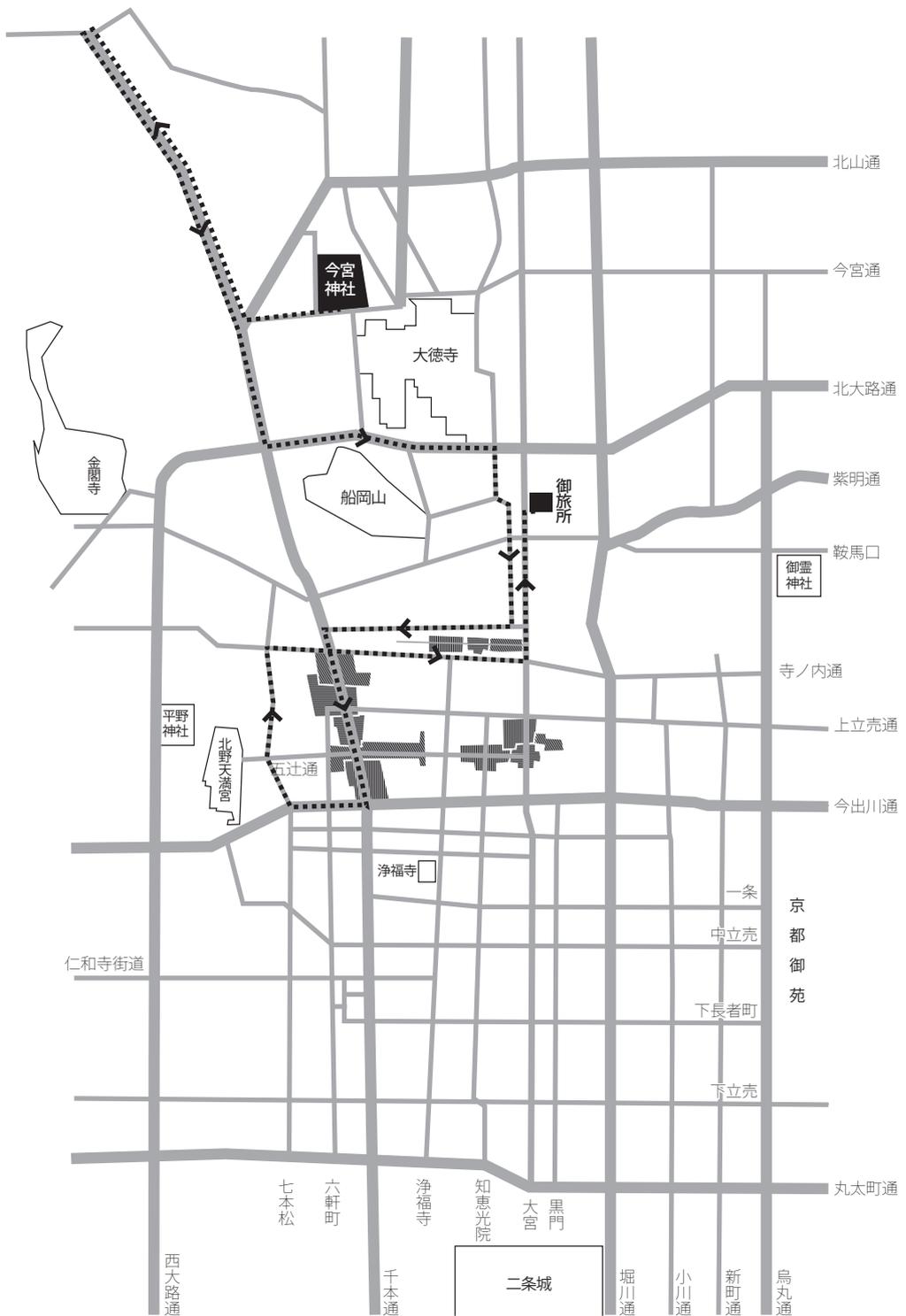
写真6 今宮神社へ向けて出発



写真7 今宮神社で修祓をうける



写真8 巡行へ出発



地図2 今宮祭（神幸祭）巡行路

を受ける。銚の順番は、歎喜町（松銚）、五桜町（剣銚）、東石屋町（葵銚）、西五辻東町（龍銚）、東千本町（扇銚）である。

午後一時半、神輿が御旅所を発つと、列の先頭で待機する車太鼓に連絡が入り、渡御列は進み始める。渡御列については神幸祭と同じ構成であるが巡行路は大きく異なる。還幸祭では御旅所を出発し、大宮通、小川通、黒門通、下立売通、千本通を経て、再び大宮通に至り、今宮神社に戻る巡行路を行く。氏子範囲のおおよそ北半分を廻ることになる。（地図3）

午後四時、銚が再び大宮通に戻ってくる。銚については特に儀式もなく、各町へ向けて帰って行き、町に着くと解体作業が行われる。東千本町（扇銚）については町の端から端を一巡してから解体を行う。銚と神輿を除くその他のものは、大宮通をそのまま北上し神社へ戻る。

午後六時、神輿が大宮通に到着、そこから五辻通を西に入ったところにある一式町にて御供所神事が行われる。「御供所」と呼ばれているが、ランドマークとなるものは存在せず、通りに面したH氏宅前をその場所としている。御供所神事は、神職が神輿に対して修祓、献饌を行い、氏子による玉串奉奠の後、撤饌という一般的な神事の流れて行われる。神事が終了すると神輿は再び大宮通へ出て、北上、北山通まで巡行した後、神社へ戻る。

二 江戸時代の今宮祭

今宮祭の運営は、銚を供奉する十二の「銚町」、その銚町を補助する

「寄町」、祭礼全体を取りしきる「行事町」の三者が行っていた。銚町は現在と同じ十二の町、寄町は十二の銚町のうち東千本町（扇銚）、花車町（枇杷銚）、観世北町（現・観世町・蝶銚）、東石屋町（葵銚）だけに付随しており、東千本町の寄町である堅社南半町以外は銚町に隣接している。行事町は北は現在の北区と上京区を隔てる鞍馬口通、南は一条通、東は堀川通、西は七本松通に囲まれた町々が輪番で勤めた。現在は寄町や行事町の制度は無くなり、明治時代に制定された学区を単位とした組織によって祭りの運営が行われている。^⑥

今宮祭の銚町には、いくつか近世期の史料が残されている。そのうちのひとつが東千本町（扇銚）に伝わる『神事記録帳』である。^⑦ 同町の年寄によって文化十四年（一八一四年）から昭和四二年（一九六七年）までの町内における祭礼関係の出来事について記録されている。記録が始められたのは文化十四年からであるが、当時の筆者によって分散していたそれ以前の記録も収録されたため、実際には文化元年（一八〇四年）からの記録を見ることができ、特に文化七年（一八一〇年）の記事は、その年の今宮祭の準備物やしきたり、作法が詳細に記されている。これもとに江戸時代の今宮祭と銚町のようなすを見ていきたい。

四月二十九日に「御銚祭り初め」とし、岡崎村から銚差しを呼んで銚を組み立てる。銚を地面に対して垂直に立てて巡行することを「銚を差す」と表現するが、これが非常に難しい動作であるため専門の技術を持った「銚差し」に依頼していた。聞き取り調査により、昭和三〇年代まで続けられていたことが確認できた。今宮祭に呼ぶ銚差しは岡崎村に限定されてはいないようであるが、東山の造園業または農家など、力仕事

の従事者に依頼することになっていったようである。銚差しに対する花代はもちろん、衣装や食事、入浴の世話まで町内で行っていた。銚が組み上がると町内周辺を巡行する。東千本町を中心に、四方に隣接する町を巡るような巡行路をとる。巡行路にあたる町々では通路を清めるなど銚を迎える準備をする。現在、銚差しの廃止とともにこれらの儀礼は行われていない。

祭りの前日である五月六日は、早朝より当屋にて留守銚を飾る。その後、昼前に「あしあらい」と称して食事をとる。正九ツ時（正午）に「町汁（まちじゅう）」と呼ばれる町会が行われ、祭り当日の打合せなどが行われたと思われる。八ツ半時分（午後三時頃）、行事町が年寄宅と銚元宅に「宵廻り」と称した挨拶に訪れるので、それぞれこれを請ける。「銚元」とは銚町における当屋のことである。町の責任者である年寄と銚元は祭りのなかで尊重される存在であり、祭りをとりしきる行事町との関係も密接であった。町会までは現在も行われているが、「宵廻り」は行われておらず「銚元」などの役割も伝わっていない。

神幸祭である五月七日は、早朝、歓喜寺町（現・歓喜町）より「御銚さしこみました」と案内が来ると千本銚八本同道して神社へ向かい神前で勧請を請ける。その際、今宮神社門前にあるあぶり餅屋で、予め注文していたあぶり餅を受け取り、お旅所の銚掛けの宿へ挨拶と共に届ける。銚掛けの宿とは、御旅所で御輿の到着を待つ間、銚を立て掛けさせてもらう家のこと、これは毎年家が決まっていた。昼頃、行事町が「大廻り」に訪れるので「宵廻り」同様、これを請ける。こうしている間に、七度半の使いが来るのでこれを請け、終わると千本通沿いの銚町から銚が

御旅所へ向けて出発する。これを受けて歓喜寺町から「御銚さしこみました」と案内が来ると扇銚、松銚、菊銚も合流し、千本銚八本同道して御旅所へ向かう。御旅所に到着すると、御輿の到着まで前述の銚掛けの宿で待機する。やがて御輿が野口まで到着し、今宮神社の家老がその旨を東千本町の銚元に告げると、扇銚だけが御旅所の鳥居の前まで移動し、西向きに野口の御輿を招く所作をする。それに従うように三基の御輿は御旅所に入る。御輿が御旅所に入ってしまうと、今度、扇銚は各町へ向けて招く所作をし、これを合図に十二本の銚は各町へ連なって帰る。この当時、神幸祭の渡御列に銚は加わらず、御旅所で神輿を迎える役割であった。現在は、銚が御旅所で神輿の到着を待つということはなくなり、渡御列に供奉するようになった。その際、銚は必ず神輿の前を行くものと言われ、渡御列の順番が神輿の前になっている点に、この「銚が神輿を招く」、すなわち「銚が神輿の先達をする」という所作の名残を見ることができる。しかし祭りの簡略化が進み、銚は御旅所まで神輿に供奉せず、その途中で自分の町へ通じる辻に差しかかると各町へ帰って行く。

五月十四日は還幸祭の前日であり、神幸祭の時と同様に午後四時頃、行事町が「宵廻り」に訪れる。還幸祭である五月十五日も、「大廻り」、七度半の使いなどがあり、御旅所へ向かうまでの手順は神幸祭とほぼ同じである。巡行は御旅所を起点に、「只今御輿からみます」の合図をうけて扇銚が御旅所入口で招く所作をすることによって始まる。京銚より順に巡行を開始する。一色町まで供奉し、神社からのお供えに御幣祓いをして町へ帰る。現在では神幸祭と同様、銚は一色町には同行せず、自分の町へと帰っていく。先行研究^⑧を参考に江戸時代の巡行路を推測したのが

(地図4)である。現在よりも巡行する範囲はかなり狭い。

還幸祭の翌日、五月十六日は鉾仕舞の式が行われる。早朝から鉾の片付けが行われる。昼過ぎに今宮神社へ参詣し、お千度を執り行い無事に終わった事にお礼を申し上げる。

この史料から、鉾が祭りにおいていかに重要な役割を担っていたかを知ることができる。最も顕著なのが東千本町の扇鉾の存在である。史料によると十二本の鉾は千本鉾八本、京鉾四本に区別されていた(表2)。扇鉾を筆頭とする千本鉾は、行事町の「宵廻り」や「大廻り」を必ず京鉾よりも先に請けるといふ決まりがあり京鉾に対しての優位性を持っていた。これは扇鉾が神幸祭の時、御旅所に到着した神輿に「招く」所作を行い、神輿はこれによって御旅所に入ることが可能となるという、神幸祭において最も重要な役割を担っていたからである。

三、今宮祭における鉾町についての問題提起

現在と江戸時代の今宮祭と鉾町について見てきたが、なぜそうなるのかの説明できない点がある。

江戸時代に十二の鉾町を、「千本鉾」と「京鉾」と呼んで区別していたという記録が残されており、しかも、千本鉾は由緒の古さを理由に京鉾に対して優位性を持っていたという点についてである。そのことについては調査時に各町の古老にヒアリングしても確認できなかったが、現在でも千本鉾に属する扇鉾、松鉾が渡御列における順番がすでに決まっており、「くじとらず」のルールが適用されている点にその名残を見ること

ができる。

しかし、実際の祭りを見てみると、京鉾に属する町が位置する大宮通周辺には祭りにおいて重要なポイントとなる御旅所や御供所が集中しており、神輿は神幸祭・還幸祭ともに必ず大宮通を通過する。これにひきかえ、千本鉾に属する町の半数以上が並ぶ千本通は、神幸祭の時だけ神輿の巡行がある。江戸時代のことをいえば、そもそも、千本通りは巡行路から全く外れているといえる。祭りの中心地から遠いエリアにある千本鉾が、中心地に近い京鉾よりも優位性が高いという、つじつまが合わないことになる。

この今宮祭から生じた疑問点を解くために、祭りの変遷に加えて、この地域が持つ時代ごとの社会的背景を考える必要がある。次の章からは今宮祭の歴史的変遷をみていくことにする。

四、今宮祭の歴史的変遷

(一) 船岡山御霊会から紫野今宮祭へ(十世紀〜十四世紀)

今宮神社が鎮座するのは、平安京の大内裏の北辺より北上すること約三キロメートル、洛北七野のうち紫野と呼ばれる一帯である。平安時代には天皇家直轄の狩猟や野草採集のための広大な野原が広がっていた。それだけではなく、ここには賀茂斎王を迎える斎院御所が設けられたり、今宮神社の社地には、平安遷都以前より疫病を鎮める疫神を祀った疫社があったという伝承があるなど、穢れを祓い清める場としての機能を持っていたといえる。紫野の西に隣接する蓮台野は、化野や鳥辺野と同様

に葬送の地であり、そのことをより一層強調した。そのような地域特性を持つ紫野で、疫神を鎮め、災いを都から祓う御霊会が行われるようになったのは自然なことであったと思われる。

正暦五年（九九四年）、都で疫病が流行し多くの死者が出た。これを鎮めるため朝廷は船岡山で御霊会を行ったが、その時のことが『本朝世紀』に記述されている。^⑩

此日、為疫神被修御霊会、木工寮・修理職造御輿二基、安置北野船岡上、先屈僧侶、令講仁王経、城中之怜人献音楽、会集之男女不知幾千人、捧幣帛者、老少滿街衢、一日之内事了、還此於山境、自彼還放難波海云々、此事非公家之定、都人蜂起勤修也

朝廷は神輿二基を造り船岡山上に安置、僧たちによって仁王経を唱えさせ、音楽を奏上するなどした。これには都中から多くの人が御幣を捧げ集まったため、町は人で溢れた。御霊会は一日のうちで終わり、帰りには難波の海に厄災を放ったという。この祭りは公家のもではなく、庶民が發起して行ったものである、ということが記されている。

正暦五年の船岡山での御霊会から五年後、長保二年（一〇〇〇年）、再び都を天災や疫病を襲う。それを受けて翌年の長保三年（一〇〇一年）に紫野で御霊会が行われた。『本朝世紀』長保三年（一〇〇一年）五月九日条に以下のように記されている。

於紫野祭疫神、号御霊会、依天下疾病也、是日以前、神殿三宇、瑞垣等、木工寮・修理職所造也、又御輿内匠寮造之、京中上下多以集会社、号之令今宮

朝廷は船岡山ではなく、紫野に「神殿三宇、瑞垣等」、つまり社殿を建

造し、そこで御霊会を行った。御霊会に集まった人々はこの社を「今宮」と呼んだとある。「今宮」とは新しく祭った神社という意味で、前述した古くからこの地で祀られていた疫社に対する呼び名であったことであろう。この時に今宮神社が創建され、こゝで行われる御霊会は祇園社や「紫野御霊会」と人々に呼ばれた。やがて「紫野今宮祭」という呼称が一般化する。^⑪

これ以降の史料を見ると、紫野御霊会は神泉苑や祇園社の御霊会のように恒例化せず、都に大きな災い事が起きる度に行われていたようである。このことを示す史料が『日本紀略』で、長保三年（一〇〇一）から長元三年（一〇三〇年）の間、三十八年ごとに文献上に確認できる。細男や十列などが出ていたという記録も見られるが、具体的な祭りのようすを伺うことはできない。

その後、紫野御霊会はおよそ三百年間、消息不明になる。その間も都を疫病や天災が襲うこともあった。それに対して朝廷はさかんに二十二社奉幣を行っており、これが紫野御霊会の代わりになったのではないだろうか。しかし、記録に残されていないだけであり、実際は続けられていたという可能性も否定できない。この期間の紫野御霊会についての記事は二件しか確認できなかったが、そのうちの一件、『皇帝紀抄』の建暦元年（一一二一年）五月九日条に、五月十六日に今宮祭の後宴として競馬が行われたという記事である。^⑫この年に祭りが行われた記録はないが、祭りに伴う後宴が行われていたのだから、実際は祭も行われていたにちがいない。もう一件は『百鍊抄』正元元年（一二五九年）五月九日条で、院丁より馬長の献上があったという記事である。^⑬

文献上に再び紫野御霊会が登場するのは、十四世紀中盤に入ってからである。この時期には「北朝今宮祭」もしくは「今宮祭」と呼び名も変わっている。『師守記』の暦応三年（一二三四年）五月九日条を最初に、ほぼ毎年のように今宮祭の記事が見られ、祭りが恒例化していたと考えられる。これらの記事を手がかりに、わずかではあるが当時の祭のようすを推測することができる。五月七日が御輿迎え、九日が今宮祭という祭りが神幸祭・還幸祭の形式をとっていること、奉幣とともに、南北山科から一疋ずつ献馬があったこと、以前は十列があったが何らかの事情で中止されてしまったことがあげられる。

(一) 応仁の乱と織豊政権（十五世紀～十六世紀）

十五世紀に入ると、今宮祭についての記録が多く見られ、断片的ではあるが祭りのようすが伺えるようになる。

『康富記』の応永八年（一四〇一年）五月九日条に、

雨降、今日紫野今宮祭也、近衛西洞院獄門内構御旅所、侍所所司代、又所司代長松奉行也、此所新儀也、先々神行之時、獄門外ニテ糟神供進之也、□獄門辺御旅所之由、申也坎之間如此、獄門内構之条、更無先規、随而大判事章忠并明宣等相付（尋カ）之処、獄門内旅所事亦在之由、兩人共返答之、尤彼獄内者、囚人棲舎之間、穢所争可構之哉、不審々々、今年洛中地口ニテ神輿造替也、勅宣歎之間、年中行事之付、

という記述があり、これは当時、通常は御旅所が近衛西洞院にあった獄門（刑務所）の外に置かれていたが、なんらかの事情でこの年は獄門内

に御旅所が置かれた事を意味している。現在の御旅所は文禄二年（一五九三年）に豊臣秀吉によって移設されたものであり、洛外に座す神を洛中へお迎えするという洛中の祭りのパターンを鑑みれば、それまではこちらが御旅所であった可能性は高い。

また、同じく『康富記』応永廿九年（一四二二年）五月十四日条に

晴、今宮祭礼也、有鉾、自去年、可為今日之由神主申請、致祭礼云々、自九日御神輿旅所有御座者也

とあり、これが今宮祭における鉾の史料上の初見となる。これより先の明徳二年（一三九一年）に北野祭の神幸祭に鉾が勤仕されたことや、御霊神社の龍鉾が永享三年（一四三一年）の由緒を持つことなども考え合わせれば、現在の鉾鉾につながる鉾が祭りに登場し始めたのはこの時期であると考えられる。祇園御霊会など、他の祭りの風流に関する記録も多く、この時期、都中で祭りが盛大化したといえる。

しかし都は応仁の乱による戦火で焼野原となってしまう。特に現在、鉾町が集中している西陣のあたりは山名宗全が本陣を置いたこともあり大きな被害を受けたはずである。今宮神社も戦火を避けて洛中に仮殿を置いていたが、これも火災によって焼失してしまい、十年以上祭りが行われる状態ではなかった。

とはいえ応仁の乱後、『神馬引付』によれば足利義尚が今宮祭に際してさかんに神馬献上を行っており、このことから今宮祭への幕府のバックアップがあったことが伺え、祭りの復興は比較的早かったといえる。住民も戦火を避けてこの地を離れていたが、乱後はまた西陣に戻り町は更なる発展を遂げる。その後、今宮祭は通常通り行われたことに加え、何

果、上京の町々は焼き払われた¹⁸⁾。その後、祭が再開するのは五年後の天正六年（一五七八年）である。祭りの記録ではないが、現在も蓮鉾を護持している芝大宮町の文書も天正六年から残されており、この頃、町も復興し始めたのではないだろうか。『兼見卿記』天正十一年五月九日条によると「今日今宮祭也、小川東成氏子祭禮企、興二千餘罷出、近代之奇麗之由申訖」とあり、「興二千餘罷出」の真偽は問われるが、焼き討ちによるダメージを乗り越え大規模に祭りを復活させたことが伺える。

今宮祭がより現在のかたちに近づくのは織田信長が本能寺で討たれ豊臣秀吉に政権が移った時である。秀吉は御土居など、京の町が大きく変わるような土木事業を多数行った。そのうちの一つが寺町の整備で、西陣の町にも寺町が置かれ、そこに今宮神社の御旅所も移された。これが現在の大宮通にある御旅所である。以後、祭りの中心が大宮通となる。『時慶卿記』文禄二年（一五九三年）によれば、「旅所已下初テ被立候、御幸道等改ト云々」と記されており、御旅所の移設だけではなく、それにもなつて御輿巡行の道順も、この御旅所へ行くことを前提に改められたようである。この時決められた巡行路が、江戸時代を経て現在の巡行路の基盤となっている。

(三) 江戸時代の今宮祭と鉾町の成立（十七世紀～十八世紀）

豊臣秀吉は御旅所移設の際に、御輿を一基造営して奉納するなど、今宮祭に対して資金援助を行ったと考えられる。秀吉の死後、今宮祭と豊臣家の関係がどうであったかは伺えないが、今宮祭は特に途絶えることなく行われていたようである。慶長年間の後半に、理由は不明であるが

還幸祭の日が五月九日から十五日に変更され、現在と同じになった¹⁹⁾。

鉾については、東石屋町（葵鉾）には、慶長十四年（一六〇九年）の日付がある古記録が伝わっている。留守鉾を収納する箱の蓋の裏面に貼り付けてあったもので、『神事預り物覚』と題し、誰が鉾のどの部品を預かって保管しているかを記したものである。この当時すでに現在と同じ部品が見られ、鉾を部品毎に分けて保管する方式をとっていたことがわかる。

また、明暦四年（一六五八年）に刊行された『洛陽名所集』には

祭礼にはたてほこ十二本もたせ産人供奉しける事なり
という記載が見られる。「十二」という数からして現在と同じ町から鉾が出されていたと見て間違いない。その根拠として、第二章で少し触れた鉾町と行事町について述べる。これについては坂本博司氏の研究が詳しいので以下、これに基づいて進めていく。

今宮祭の執行について、鉾町は基本的に一つの町で一つの鉾を毎年勤仕することが決まっている。一方、行事町は三～四町から成るグループに分けられ、そのグループ毎に輪番で祭の準備等に当たる。この制度が整えられたのが寛文十二年（一六七二年）のことである。江戸時代、西陣は大きく上西陣組と下西陣組に分かれており、そのうち今宮神社の氏子に属する町々を、上西陣組では十五番組、下西陣組では二十六番組に分けた。行事町は上下両組一年交替で勤め、上の十五番組、下の二十六番組が一巡するのに四十一年かかる、つまり、行事町は四十一年に一度回ってくるのである。この番組には鉾町は含まれていない。ということはこの番組に現在の鉾町が見つかなければ『洛陽名所集』に記載された十

二の鉾は現在と同じ鉾と考えてもよいことである。ただし上西陣組については下西陣組と同じことが行われたと思われるものの史料がないので元禄四年（一六九一年）に制度が改正された時の記録が手がかりとなる。結論をいうと現在の十二の鉾町はこの番組には含まれていない。したがって十二本の鉾は現在と同じと考えてよいとえる。今宮祭の鉾町は『洛陽名所集』の明暦四年（一六五八年）までには成立していたのである。

豊臣秀吉の時代から百年がすぎた元禄期にもなると、今宮祭は再び低迷を迎える。それを払拭したのが將軍徳川綱吉の生母である桂昌院であった。桂昌院は大徳寺周辺の出身であり、自身の氏神が廃れていくのを見過ごせなかったのだろうか、元禄七年（一六九四年）に今宮神社社殿の再建を行った²¹。そしてその翌年、元禄八年（一六九五年）の今宮祭は善美を尽くしたと伝えられている。この時、桂昌院から今宮神社に対してかなりのバックアップがなされたと考えられる。

そして、氏子の範囲が明確にされたのもこの時期であった。『京都御役所向大概覺書』享保二年（一七一七年）には「東ハ西堀川限、西ハ七本松通限、南ハ二条御城番北之方御役屋敷迄、北ハ千束村上限」という風に、現在の氏子区域とされている範囲とほぼ一致する。

以上、今宮祭の歴史を見てきたが、現在の今宮祭につながる素地は、豊臣秀吉の時代から江戸時代の初期にかけて形成されたものであることがわかった。したがって三章で提起した、祭りにおいて優位性を持つ千本鉾が、優位性を持たない京鉾よりも祭りの中心地から離れた場所に存在するという矛盾はこの時期に原因を見いだせそうである。千本鉾の優位

性は「京鉾よりも古い」ということに根拠を置いている。現在の今宮祭の運営組織は「町組」との関係が深い。この「町組」は応仁の乱を契機に誕生し織豊政権時代に行政単位として整備された。これは現在の今宮祭へとつながる素地が作られた時代と一致する。このことから今宮祭の鉾町との関係も深いと思われる。次の章からはこの「町組」の形成過程を調べ、町の新旧や関係性について考えて行く。

五、上京の町組と鉾町の形成過程

室町時代から戦国時代にかけての京都の都市社会については、その構造の成り立ちを空間と支配の両面から分析した仁木宏氏の研究が詳しい²²。仁木氏によれば、「応仁の乱によって、通説では京都は焼け野原になったとされる。乱後、京都は復興したものの、その都市域は極端にせまくなり、『島』のような上京・下京が旧左京域にうかぶイメージで復元された」とあり、私たちが思い浮かべる都市の風景とは全く異なるものであったということである。当時の京は上京・下京と洛外の寺社の門前町からなる複合都市であり、上京・下京は周囲に「惣構」と呼ばれる土塁や堀が巡らされ、二者間は室町通だけでつながっていたとされる。上京・下京の惣構の内側には道路はさんで向かい合った家同志によってつくられた個別町が存在し、個別町もまた町を通る道路上、町の出入り口にあたる位置に「構（かまえ）」と呼ばれる木戸や柵を設け、道路を封鎖することによって町を囲っていた。このように町のなかに町が存在するという、複雑な入れ子構造となっていたのである。

さらに応仁の乱後、頻発した盗賊や土一揆に対する住民の共同防衛を目的に「町組」と呼ばれる個別町の連合体が生まれる。戦国時代、町組は個別町の上位組織であるが、その実態は不定型なもので、明確な役割や機能が課せられるようなものではなかった。これが組織として機能するのは織豊政権の世になってからである。

上京の町組の具体的な構成について確認できる最古の史料は元龜三年（一五七二年）『上下京御膳方御月賄米寄町』である。織田信長による政策で、各町への貸付米とその利息徴収の記録である。そこには、一条組（四町）、立売組（十四町）、中筋組（十二町）、小川組（十町）、川ヨリ西組（二十一町）の五町が記載されている。このうち「川ヨリ西組（二十一町）」が後に「西陣組」と呼ばれるようになり、この町組が、前の章で述べたように江戸時代には鉾町や行事町となる町組へとつながっていくのである。「川ヨリ西組（二十一町）」から「上下西陣組（二一九町）」への発展について、杉森哲也氏による研究が優れている²⁸。この杉森氏の研究によって見出された上京の町の成立過程のなかから今宮祭の鉾町をピックアップすれば、鉾町の形成過程についてもいえるのではないだろうか。

杉森氏は元龜三年（一五七二年）の『上下京御膳方御月賄米寄町』、元和元年（一六一五年）「新町御地子御赦免之帳」、寛永三年（一六二六年）の「西陣四千貫文借帳」などの史料を使って西陣組一九五町のうち、西陣組古町一四五町の成立発展段階を次の三時期に設定した。同様に西陣組新町五十町についても二段階に設定しているが、本稿では古町に対する成果のみ利用させていただくため、新町についての詳細は割愛する。

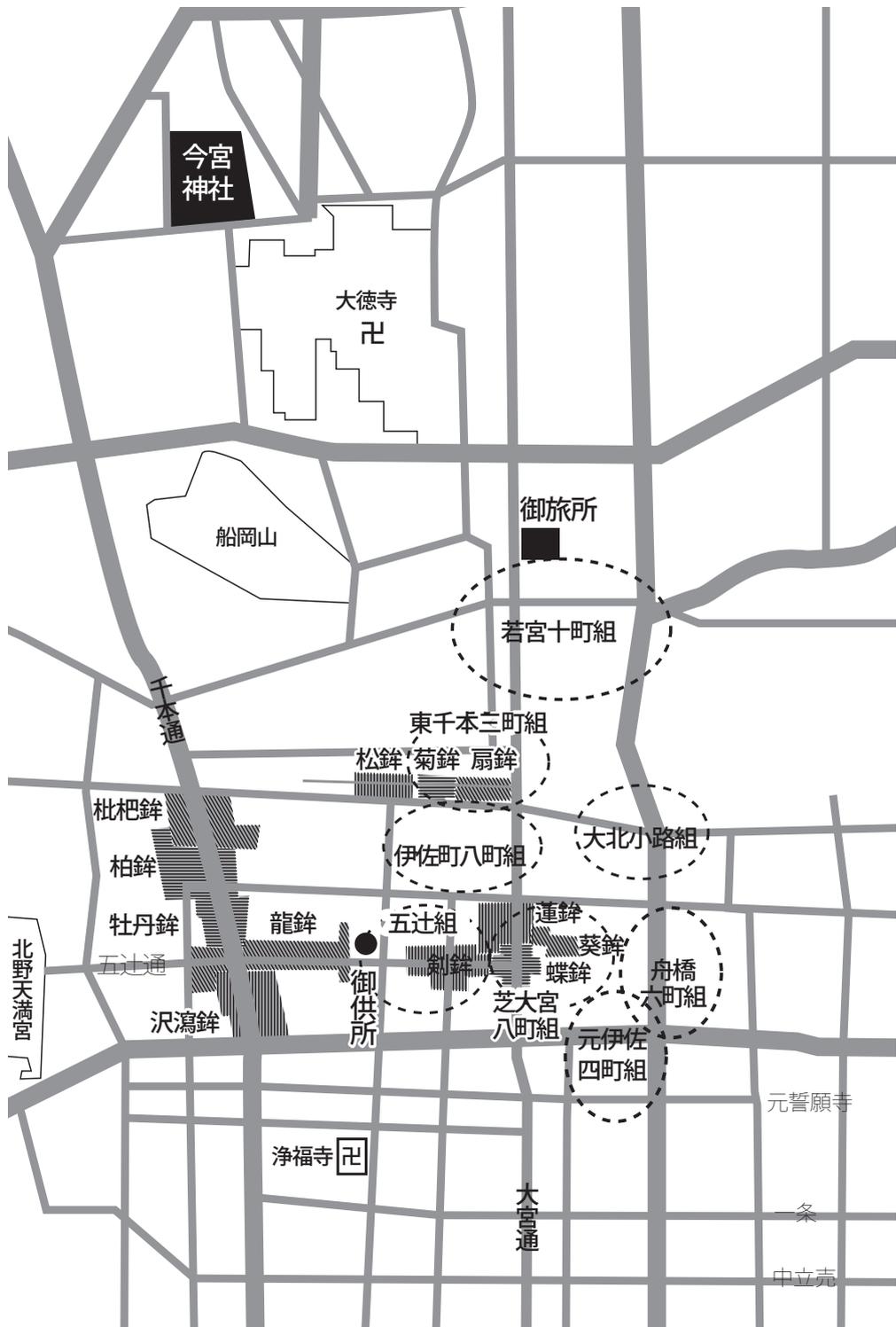
①元龜三年（一五七二年）段階（元龜年間以前に成立）
②天正十九年（一五九一年）段階（天正年間に成立）
③元和元年（一六一五年）段階（文禄・慶長年間に成立）
この表を今宮祭の鉾町に適用してみると、

①元龜三年段階：東千本町（扇鉾）、西千本町（菊鉾）、五桜町（劍鉾）、芝大宮町（蓮鉾）、東石屋町（葵鉾）、観世町（蝶鉾）

②天正十九年段階：②歛喜寺町（現歛喜町・松鉾）、作庵町（柏鉾）、花車町（枇杷鉾）、大下之町（現牡丹鉾町・牡丹鉾）

③元和元年段階：西五辻東町（龍鉾）、上善寺町（沢瀉鉾）

という風に分類できた。さらに現在の鉾町の分布図に①元龜三年段階にある町組のエリアを重ねてみると（図2）のようになる。これを見ると祭りの中心といえる大宮通に近いエリアに最古の町組が集中することがわかる。しかもそのほとんどが京鉾四町と重複する。つまり、今宮祭においては格が低いとされる京鉾を勤仕する町の方が早くに発展し、千本通に面した町の方が後発であったことがいえる。こうなると最初の方で述べた疑問点のうちの一つ、「千本鉾は由緒の古さを理由に京鉾に対して優位性を持っていた」というのは成立しなくなる。町としての成立は早くても鉾の勤仕は後の時代になってから始められたということもいえないわけではないが、繰り返し言うように、祭りは中心は大宮通である。そこに位置する町々が主体となって、今宮神社から町内へ御輿を招いていたことはまちがいない。御輿を招くのに重要な役割を果たす鉾を勤仕しないはずはないと考える。したがって千本鉾と京鉾の格の違いは町の新旧ではなく、別の事情があったと推測される。これについては本多健一氏が



※道路は現在のものを使用

図2 今宮祭における鉾町の分布と町組位置

織田信長による元亀四年（一五七三年）の上京焼き討ちを根拠に説明している。²⁸

本多氏は同時代の文献史料から焼き討ちによって罹災した範囲を推定し、それを鉾町の分布に重ねる作業を行った。それによると、京鉾四町は罹災してしまったが千本鉾八町は焼失を免れたことが明らかになった。本多氏によれば「焼討からの復興に手間取って鉾を新調する余裕がなく、結果的に千本鉾の台頭を、手をこまねいて見るよりほかはなかったのではないだろうか。17世紀の江戸期に入り、復興を遂げた大宮地区の町は京鉾を新調して千本鉾に対抗したが、いったん確立した格式の優位は容易に覆せるものではなく、幾度かの争論を経つつ、そのまま後世に至ったと推定しうる。」ということである。

非常に説得力のある説であるが、いくつか疑問点が残る。「焼討からの復興に手間取って鉾を新調する余裕がなく」とあるが、芝大宮町（蓮鉾）に伝わる町の出納の記録を見ると、²⁹ 焼き討ちからそれほど時を経ない天正年間にすでに宴会や物見遊山の支出に関する記述があり、決して余裕がない状態ではなかったと思われる。『兼見卿記』天正十一年五月九日条には「今日今宮祭也、小川東成氏子祭禮企、輿二千餘罷出、近代之奇麗之由申訖」とあり、意外と復興は早かったといえる。

また、千本鉾の台頭というが、千本鉾のうち鉾の格を強く主張するのは東千本町（扇鉾）だけであり、他の七町はこれに従っている感が強い。現在の聞き取り調査においても千本鉾、京鉾についての伝承をまったく聞く事ができなかったことから、当時においても十二鉾の間に格差はさほど意識されていなかったのではないだろうか。このようなことから、千

本鉾の京鉾に対する優位性は町の新旧ではなく、千本鉾の筆頭を名乗る東千本町が京鉾四町に対して、何らかの事情、たとえば商売の関わりで対抗するために格上を主張するようになったのではないかと考える。

六、むすび

最後に今宮祭の鉾町の形成過程について整理したい。

今宮祭における鉾の文献上の初見は応永廿九年（一四二二年）である。その後どのような経緯をたどって現在の十二本の鉾に定まったかは不明であるが、今宮祭の十二の鉾町は、遅くとも江戸時代初期の明暦四年（一六五八年）までに成立していた。この鉾町の形成過程は、応仁の乱後から十六世紀の織豊政権時代の間で成立した上京を構成する重要な単位である「町組」との関わりが深い。

江戸時代、鉾町がある西陣の町は「西陣組」という町組で統制されていた。これに所属する町の成立時期は杉森哲也氏の研究により、①元龜三年段階、②天正十九年段階、③元和元年段階の三期に分けられ、この成果を鉾町に適用すると次のようになる。

① 東千本町（扇鉾）、西千本町（菊鉾）、五桜町（剣鉾）、芝大宮町（蓮鉾）、東石屋町（葵鉾）、観世町（蝶鉾）

② 歎喜寺町（現・歎喜町・松鉾）、作庵町（柏鉾）、花車町（枇杷鉾）、大下之町（現・牡丹鉾町・牡丹鉾）

③ 西五辻東町（龍鉾）、上善寺町（沢瀉鉾）

最も古く町として成立し、祭りに鉾を勤仕したのは京鉾四町と千本鉾八

町のうち東千本町であったと考えられる。その後、東千本町から西千本町が独立した。次に歓喜寺町、作庵町、花車町、大下之町が加わり、東千本町と与して千本鉾に属するようになる。最後に千本鉾の残り二町である西五辻東町、上善寺町が加わり十二町が揃う。これにより、千本鉾と京鉾の格の違いを町の新旧に求めることが成立しなくなる。近世以降、祭りの中心地は大宮通で、これに元々から参加していたのは東千本町と京鉾四町であり、他の鉾町は後発で祭りに参加するようになった。なぜ東千本町以外の千本鉾より古いはずの京鉾が「新興」「格下」とされたのかについては今後の課題としたい。

鉾町の形成過程を辿る中で、今宮祭が行われる空間の変遷についても明らかにした。十五世紀以前の今宮祭では上京の中心地でもあった小川地区と近衛西洞院に設けられた御旅所を結ぶ小川通を中心に祭りが展開されていた。その範囲は西陣に限らず、上京の町域のほとんどを含む広範囲なものであった。そのなかで町域の最北で、今宮神社から見た際に町域への入口となる場所にあった大宮通の町々は、神をお招きする役割を持って鉾を勤仕していたと考えられる。応仁の乱以降、上京の町が「構」によって外部と遮断され町域が狭くなると近衛西洞院の御旅所は使われなくなった。狭くなった町域のなかで御旅所が設けられ祭りが行われていたと推測されるが、豊臣秀吉の時代になって、現在の場所への御旅所の設置とともに、大宮通を中心とする祭りの空間構成へと改編された。その時の巡行路などが現在の今宮祭の素地となって受け継がれている。

註

- ① 平成二十三年（二〇一一年）の筆者による調査結果を基に記述（本調査は「京都の民俗文化総合活性化プロジェクト」において実施）。
- ② いづ、現在のような渡御列の構成になったのかはつきりしない。昭和十六年（一九四一年）の今宮祭列書（今宮神社発行）には十二の鉾の名前が見られるが、昭和四十七年（一九七二年）のものでは神幸祭、還幸祭ともに名前が見られるのは扇鉾、菊鉾、松鉾の三本で、神幸祭のみ見られるのが牡丹鉾と柏鉾、還幸祭のみ見られるのは葵鉾、劍鉾、枇杷鉾、龍鉾であり、蓮鉾、蝶鉾、沢瀉鉾については既に祭りに出ていなかったようである。蝶鉾を護持する観世町については町内の古老に聞き取りをすることができた。それによると、戦後、二、三回は祭りに勤仕した記憶はある、町内の人手不足で昭和三十年代を最後に渡御に加わることは止めたとのことであった。
- ③ 渡御列の順番・神幸祭（平成二十三年度）
車太鼓、社名旗、先駆神職、高張提灯、劍鉾、子供鉾、八乙女旗、八乙女、花車、子供御輿、獅子、真榊、伶人、幸鉾、御楯、御矢、御弓、御劍、御幣、西社町（童子）、御車、高張提灯、先御輿（鷹）、高張提灯、中御輿（アケイ）、高張提灯、大宮御輿、宮司、高張提灯、役員。
なお、還幸祭も同じ構成となっている。
- ④ 今宮神社御旅所 京都市北区雲林院町（大宮通鞍馬口上ル）。
- ⑤ 東石屋町（葵鉾） 元は東石屋町が護持していたが、昭和三十年代には諸事情により町として祭りに勤仕することを辞めた。その後、有志三名により運営されてきたが、平成十七年（二〇〇五年）からは同志社大学が参画し、現在は同大の教員と学生を中心に運営されている。
- ⑥ 坂本博司「今宮祭と西陣」〔芸能史研究〕七十一、一九八〇年）

- ⑦ 『神事記録帳』文化十四年（一八一七年）～昭和四十二年（一九六七年）（東千本町文書）。
- ⑧ 村山弘太郎「近世の今宮祭と巡幸路」（『京郡民俗』二十三、二〇〇六年）
- ⑨ 『今宮神社由緒略記』今宮神社社務所、一九八二年
- ⑩ 『日本紀略』長保二年（一〇〇〇年）四月七日条 他 國史大系10／國史大系刊行會、一九二九年
- ⑪ 「今宮祭」という呼称については『日本紀略』の寛弘三年（一〇〇六年）五月九日条「世號之今宮祭」という記事が初見であるが、『日本紀略』のなかでは一貫して「紫野御霊会」と記載されている。『日本紀略』の紫野御霊会に関する最後の記事である長元三年（一〇三〇年）から『皇帝紀抄』建暦元年（一一二一年）の間に「紫野今宮祭」が一般的な呼称となった。
- ⑫ 『皇帝紀抄』建暦元年（一一二一年）五月九日条
五月十六日、瀧口等於右近馬場競馬、是紫野今宮祭後宴、去十日延引之故也、
- ⑬ 『百鍊抄』正元元年（一一五九年）五月九日条
九日壬子紫野今宮祭也、自院廳被騎猷馬長、此事中絶年、尚今年被奥行依疫疾御祈也
- ⑭ 『北野天満宮史料』明德二年（一二三三年）
一、其後一御銚參之後神輿神幸、保々御銚如先々參
- ⑮ 『長興宿禰記』文明七年（一四七五年）二月廿日条によると、今宮社の仮殿は、北野天満宮の仮殿とともに現在の同志社大学新町校舎の北あたりに置かれていた。
- ⑯ 『実隆公記』永正四年（一五〇七年）五月九日条
- ⑰ 『伯家部類』天文八年（一五三九年）
- ⑱ 『史料京都の歴史』第四卷市街・生業、七卷上京区（一九八〇年）

- ⑲ 『土御門泰重卿記』元和元年（一六一五年）五月十五日条
- ⑳ 前掲⑥
- ㉑ 『基瀬記』元禄七年（一六九四年）十一月九日条
- ㉒ 仁木宏『京都の都市共同体と権力』（二〇一〇年）
- ㉓ 杉森哲也『近世京都の都市と社会』第三章 町組の発展過程——上京・西陣組を事例として——（二〇〇八年）
杉森氏は、上京・西陣組成立過程を明らかにするために、まず「上古京拾式組并枝町并新町軒約分割」（文政三年（一八二〇年）同右）を用いて、古町・新町を選別し、西陣組で古町、新町それぞれに所属する個別町をリスト化することで、文政年間における西陣組の全体像を明らかにした。次にそれを基に、古町に対しては、A『上下京御膳方御月賄米寄町』（元龜三年（一一七二年）『立入宗継文書』）に確認できる二十四町名、B『西陣四千貫文借帳』（寛永三年（一六二六年）『古久保家文書』）に確認できる三十三町名、C『新町御地子御赦免之帳』（元和元年（一六一五年）『古久保家文書』）に確認できる七十五町名を文政年間のリストの上で確認していき、各史料で確認できた町名同志の重複の有無が一目でわかる一覧にまとめた。
- ㉔ 本多健一「中世後期の京都今宮祭と上京氏子区域の変遷——そこに顕現する空間構造に着目して」（『歴史地理学』五十一（四）二〇〇九年）
- ㉕ 『芝大宮町文書』天正六年（一五七八年）～寛文五年（一六六五年）の町内の出納の記録である。

参考文献

『日記記事』（黒川道佑著 延宝四年「一六七六」序）

『京都御役所向大概覺書』（享保二年〔二七一七〕頃成立）

『今宮御神事行事勤來控』（安政六年〔二八五九〕）／日本祭礼行事集成・五卷（一九七二年）

『年中行事大成』（文化三年〔一八六一〕序）

『今宮神社由緒略記』今宮神社社務所（一九八二年）

『室町時代』脇田晴子（一九八五年）

『京の祭の遺宝・劍鋒の伝統展』（財）京都市社会教育振興財団（一九八六年）

『中世京都と祇園祭』脇田晴子（一九九九年）

『賀茂別雷神社境内諸郷の復元的研究』須磨千穎（二〇〇一年）

『祭祀空間の伝統と機能』第二章 京都のまつりと氏子区域」黒田一充（二〇〇四年）

『京都町共同体成立史の研究』五島邦治（二〇〇四年）

『中世京都の都市と宗教』河内将芳（二〇〇六年）

『首都の経済と室町幕府』早島大祐（二〇〇六年）

「中世京都の祭礼における銚とその変容」——比較祭礼分化史のための基礎的考察—— 本多健一（『芸能史研究』一八九 二〇一〇年）